

エリート御曹司に甘く介抱され、  
独占欲全開で迫られています

## 目次

エリート御曹司に甘く介抱され、  
独占欲全開で迫られています

番外編 君は太陽

エリート御曹司に甘く介抱され、  
独占欲全開で迫られています

プロローグ 残業していただけなのに

「失礼します、小鳥遊たかなしです」

午後六時半。若々しい張りのある声が、がらんとした経理部に響く。

ドラマに出てくるようなきりつとした革靴の足音が、書類にまみれた穴倉のようなこの部屋に外の風を連れてきた。

営業部の王子様——小鳥遊祐一郎ゆいろういちろうが入ってくると、部屋の雰囲気はいつもがらりと変わってしまう。五階の片隅にある、広くも狭くもない部屋にとつて、この男は眩まぶしすぎる存在だ。

パソコンに向かって伝票入力の仕事をしていたさやかは、亀が身を守るがごとく、ひゅつと背中を丸めた。

彼のことは苦手だ。隣に並べると、わけもなく身体を縮めなくなる。

そもそも最低限しか施していない上に、夕方になってほとんど落ちてしまった化粧に、地味なひつまめ髪。トドメにやぼったいカーディガンを羽織っている自分の存在が、なんだかいたたまれなくなってくるから。

ただでさえ月末締めが近くて、ひとり残業でキリキリしているのだ。これ以上煩わづわせないでほ

しい。

（来るな来るな、来ないでくれ……!）

しかし、その声は無慈悲にもさやかかの名前を呼んだ。

「あ、亀山かめやまさん。今日も残業？ 精が出るね」

さやかは諦めて、しぶしぶ顔を上げた。業務上、彼を無視するわけにはいかない。

「お、お疲れ様です……」

小鳥遊はなぜかこうしてさやかかひとりの時にばかり、用を頼みにやってくる。

定時外の処理は面倒だし、二人きりで正直息が詰まるが——仕事である以上、仕方ない。苦手な相手であろうと、業務はきっちり遂行しなくては。

「領収書ですか。もう時間外なので、入力は明日になりますが」

領収書を預かることを了承しつつも、そこは譲れない。

「もちろん。期限は問題ないんだけど俺、明日休みだから。今日のうちに渡しておきたい」

小鳥遊は白い歯を見せて笑った。人好きのする笑みだ。

少し茶色がかった、切れ長の艶っぽい目。上から咎とがめられることのない程度の、絶妙な色合いに染められた栗色の髪がさらりと目の端にかかっている。

さらに、ピンストライプの細身なスーツを嫌味なほど見事に着こなしている。自分に自信のある人じゃないと着こなせない、とても洗練された装いだ。

——なんというか、すべてがこなれている。いかにも遊び人って感じ。

「ああ、それでわざわざ」

打ち合わせ帰りの営業部のエースが、こんな冴えない経理の自分のところへ。

さやかは無理矢理自分にそう言い聞かせた。

だって、そうじゃなきゃおかしいじゃないか。

「ありがと、亀山さん。お礼にこれあげる」

——どうしてドがつくほど人気者の彼が、毎度自分にこうして構ってくるのだろう。はつきり言って不気味だ。

「いりません」

差し出されたペットボトルの紅茶ラテを、さやかはノータイムで拒否した。普通の男性社員が相手なら、失礼にあたる言動だろう。

しかしこの相手に限っては、さやかは塩対応を徹底していた。

「なんで。紅茶好きでしょ。あ、そうだ。これから帰るなら飲みいく？ 夜でもやってるいいティーサロン知ってるんだ」

（確かに私はコーヒーより紅茶党だよ。だけどさ！）

どうしても警戒してしまう。だって。

さやかは目を瞑り、渋い顔でため息をついた。

（だってこの人、誰にでもこんな感じで——軽すぎ！）

さやかだけではない。他の社内の女子にもグイグイ行く。おそらく、というかほぼ確実に、社外

の女子に対しても同じように接しているはずだ。

（面倒ごとに巻き込まれるのは嫌！）

恋愛沙汰から遠ざかることで、さやかは今の平穩を手に入れているのだ。たとえお世辞だとしても、営業部の王子様と深く関わるなんて、冗談ではない。

黙り込んでしまったさやかを見て、小鳥遊はふっと笑う。

「亀山さん、ウブだなあ。たかだかお茶で、そんなにも考え込んで」

「いや、普通に行きませんけど」

「なんで？」

冷たく断つても、小鳥遊はめげない。

「小鳥遊さんのそういうとこ、どうかと思いますよ」

「そういうとこって？」

めげないどころか、そうやって楽しそうに聞いてくるところだと言ってしまった。

少しイライラしながらも、さやかは冷静に返事をする。

「見境なく、誰彼構わずそうやって……」

「へえ。俺が一途になれば、亀山さんはお茶OKしてくれるの？」

「ますます、ごめんですね」

「なんで？」

まったくこたえていないその顔を見ると、バカにされているんだろうということがありありと

伝わってきた。

（私で遊んでるんだろうな……堅物経理の亀山を、からかつてやろうって）

さやかは無言のまま領収書をしまい、立ち上がった。

ここで二人きりで話していても、こちらの分が悪くなるばかりだ。

（女子社員をからかいたいなら、他を当たつてよ……）

数えきれないほどの女子に言い寄られているだろうに、なんで毎回自分のところに来るんだろう。ため息が出そうな気持ちをこらえ、さやかは鞆（かま）を肩にかける。

部屋を出ようとしたまさにその時、小鳥遊が不意につぶやいた。

「あ、この稟議書って」

小鳥遊のその声に、さやかはぎよつとして振り向いた。

「嘘っ……」

昼間、他の書類と一緒に専務に提出したはずだったのに。

書類をぺらりと捲（めく）つて、小鳥遊は「あちゃあ」と言った。

「これ、提出期限……」

「今日までです」

そう言いながら、さやかは書類を小鳥遊からひったくった。

この時間なら、まだいるかもしれない――

「痛っ……嘘でしょ……!」

しかし走り出した瞬間、さやかの履いていたヒールがぐらつとゆらぎ、足首がぐきつと悲鳴を上げた。

（まずい、長時間の座り仕事がつたつて、足がつ……!）

よろけて倒れる前に、小鳥遊の手がさやかの腕を掴んだ。

がつしりした手。細身な彼だが、その腕には十分な筋力があるようで、軽々とさやかを支えている。

「これ、俺が出しとくよ。ちょうだい」

そう言つて小鳥遊は鮮やかに書類をさやかの手から奪った。

「待って! もしかしたら、まだ専務」

「もう帰つてと思うよ。今日はこれから親会社とのレセプションがあるから」

呆然とするさやかに、にっと小鳥遊が笑いかける。

「俺も参加予定だし、ついでに渡しとくよ」

ああ、とさやかは心の中のため息をついた。

（親会社、ね。この人にとっては実家みたいなものよね）

小鳥遊は、ただの営業ではない。それはあくまで仮の姿。

修行のため、子会社に出走してきているが――経営者一族・小鳥遊家の歳若き御曹司なのだ。

だから、末端の社員にすぎないさやかには縁遠い、華やかなレセプションの場にも顔パスで赴くことができる。

これで一応、稟議書は間に合う。けれどなんだか、さやかはどっと疲れた。

「そうですか……それは、ありがとうございます」

「へえ、亀山さん。お礼とか言えるんだ？」

片眉を上げて、小鳥遊はさやかを見下ろした。

「私をなんだと思ってるんですか」

すると、小鳥遊はふふんといったずらっぱい笑みを浮かべた。

「んー、懐かない亀？　ところでこれって、貸し——だよな？」

うっと言葉に詰まったさやかに、小鳥遊は書類をわざとらしく見せつけた後、颯爽と出ていった。夕方だというのに、ちっともくたびれていないスーツの後ろ姿が憎たらしい。

「……亀はそもそも、懐かないでしょ」

小声でそう毒づきながら、さやかはバッグを抱え直した。なんだかさつきより、ずしつとして  
いる。

「あ……いつの間に」

突き返したはずの紅茶ラテのペットボトルが、いつの間にか鞆かばんに押し込まれていた。

「はああ……」

大きなため息をつきながら、さやかは階段を一段一段踏みしめ、会社の通用口へ向かった。

エレベーターがあるため、この階段を使う人はほとんどいない。だから、ちよつと大きなため

息でも許してほしい。

「もう……何が亀だよ、貸しだよ」

ぼそつとそう吐き捨てた。自分でもびつくりするくらい刺々しい声音だ。

「亀？　貸し？　なんのこと？」

「ひゃっ」

突然後ろから声をかけられて、さやかはぎょつとした。振り向くと、そこには同期の橋本はしもとが立っていた。

「もう、びつくりさせないですよ」

「ごめんごめん。亀ちゃん、もう帰るの？」

「そう。橋本くんは……その様子だとまだ？」

橋本は手ぶらの上、シャツを袖捲まくりし、ノーネクタイという姿だった。ラフな格好だが、彼はシステム室勤務——社内から出ない仕事なので、営業のように外面を飾る必要はない。

「そうそう、総務の課長がデータ飛ばしちゃったみたいでさ。長丁場になりそうだから、三階の休憩室からコーヒー取ってこようと思ってさ」

そう言って橋本は微笑ほほえんだ。同期一ふくよかな彼が笑うと、まるでエビス様のような表情になる。縁起のよさそうな見た目通り、朗らかで穏やかな人柄の彼は皆に好かれている。他部署からもよく飲み会に誘われるタイプだ。

そんな彼のことを、さやかも当然好ましく思っている。化粧っ気がなく、やぼったく、社内で一

番『論外』な女子社員であろう自分にもごく普通の態度で接してくれる大切な同期だ。

「それはご愁傷様……あ、そうだ。これ飲む？」

そう言いながら、さつき小鳥遊から押し付けられたペットボトルを橋本に差し出した。

「えっ、いいの」

「うん、もらっただけ飲まないから」

すると彼は、ははあという顔つきになった。

「なるほど。営業部の王子様に退社間際、滑り込みで領収書を持ち込まれて、お礼としてこの紅茶ラテを渡されたと」

「なんでわかったの、名探偵？」

「さつき小鳥遊さんとすれ違ったからさ。格好からして、外回り帰りっぽかったし」

屈託なくそう言った彼に、さやかは聞いてみた。

「ねえ、ああいう人って……同性から見てどうなの？」

「どうって——亀ちゃん、質問に悪意がにじんてるよ」

こらえられないといった様子で、橋本が笑い始めた。さやかは唇を尖らせながら話を続ける。

「だってチャラすぎるよ。見境ないし、距離感近くて」

「営業の人って、みんな愛想いいからねえ、それも仕事のひとつみたいなもんだし」

「そうなんだけど……」

「……なんかあった？」

そう言われて、さやかは唇を噛んだ。

（別になにかされた、とかじゃない……ただ会う度にかかわれてる気がするってだけ……）

しかし、それを口に出さないだけの分別はさすがに持ち合わせている。

イケメン御曹司が地味女に構うわけがない。そんなの、勘違いに決まってる——そう思われるだけだ。

「ううん、なんもないけどさ。じゃ……仕事、頑張ってね」

「そっか。じゃあ、お疲れ様」

そう言って、橋本は三階へと消えていった。さやかは再びふうと息を吐いて、階段を下りていく。あとちよつとで地上だ。

（はあ……なんでこんなイライラするんだろう）

冷静に、大人な対応をした方がいい。頭ではそうわかっているのに、小鳥遊が相手となるとどうもうまくいかない。

他の先輩社員の軽口や諫言には、それなりにちゃんと対応できていると思う。

でも、小鳥遊にからかわれると、ついムツとしてしまうのだ。適当に笑って流せばいいとわかっているのに、どうしてもできない。

（…まあ、そのうちあの人、この営業なんてやめて、本社の役員にでもなるんでしょ）

そうなれば、もう顔を合わせることもなくなる。

「それまでの辛抱……あいたっ」



さつき少し捻<sup>ひね</sup>ってしまったのか、足がズキッと痛んだ。

「エレベーター……いや、歩こう」

とある事情があつて、さやかは狭い場所が苦手だ。だから、エレベーターは避けるようにしていた。だけど、足首を捻<sup>ひね</sup>った今の状態で、この長い階段を下りるのはさすがに厳しい。

とつくにエレベーターで悠々と地上に降り、タクシーでレセプション会場に向かつているであろう小鳥遊を想像して、もやもやした気持ちになつてきた。

（はあ。どうせ私は、ノロマな亀ですよ……）

御曹司には毎日あくせく働いて、気疲れしている庶民の生活なんて、知るよしもないだろう。

（でも、亀だつて頑張ってるんだから）

今年で二十七歳。新卒の頃から数えて、勤続七年。最近では部長から、帳簿の出納も任されるようになってきた。地味ながらも堅実に自分の仕事を積み上げてきたという自負がある。

寡黙な部長からコツコツ勝ち取った信頼と、同僚たちとの穏やかな人間関係。どちらもさやかが今までの仕事ぶりで時間をかけて築き上げたものだ。

（それをひっかきまわされたら——誰だつていい気はしないでしょ）

さやかは言い訳するように心の中でそう思った。

（そうだよ、仕事なの。遊びに来てるんじゃないんだから……）

だからあまりムキにならないように。さやかは自分にそう言い聞かせ、階段を一段一段、下りていった。

「あれー、小鳥遊さん？ 帰ったんじゃないかなかったですか？」

ペットボトルを小脇にシステム室に戻った橋本は、入り口で佇む小鳥遊を見て目を丸くした。

「いやー、日誌つけてから帰ろうと思ってデスクに寄ったら、パソコンがエラー起こしちゃって」

「おぉー？ それじゃ、同行しますよ」

「ごめんね、残業中に」

「いえいえ。外回りお疲れ様です」

橋本がそう言うと、小鳥遊は端正な顔をくしゃつとさせて笑った。

「ああ、誰かと違つて優しいなあ……橋本くんは」

こんなふうに言われるのは慣れつこの橋本は、苦笑しながら尋ねた。

「もしかして、亀山ですか？」

「えっ、なんでわかったの？」

小鳥遊は驚いた後、橋本が小脇に抱えているペットボトルに視線を向けた。

「ああ……そういうことか。あいつめ……」

ペットボトルをとん、と近くの机に置いて、橋本は肩をすくめた。

「いやあ、すみません。ご馳走になります」

へへ、と取り成すように笑うと、小鳥遊はじつ、と橋本を見てきた。

「橋本くん、亀山さんと仲いいの？」

うつすら笑顔を浮かべているが、なんだか眼光が鋭い気がする。

「……同期ですからね」

「へえ、そっかあ……」

その声になんとか含みがある気がするの、橋本の気のせいだろうか。

「まあ、その、すみません。彼女ちよつと潔癖などところがあるけど、悪いやつじゃないんです」

「知ってるよ。いい子だよ。一本筋通って、仕事に手を抜かないタイプ」

おつ、と橋本は少し意外に思った。

小鳥遊は決して見てくれと愛想だけの人間ではないようだ。さやかのような目立たない社員のこ  
とまで、よく観察している。ダテに営業成績一位ではない。

「いや……さすがですね、小鳥遊さんは」

「えっ、なに？ いきなりどうしたの」

「人をよく見てるなって。営業部でトップの理由、わかりますよ」

すると小鳥遊のちよつと不穏な空気は薄れ、好きにする愛想のよさが戻ってきた。

「なんだよー、褒めても何も出ないぞ？ でも……ちよつと違うかな」

「？」

軽く首を傾げる橋本に、小鳥遊は謎めいた笑みを浮かべ言った。

「誰でもよく見るわけじゃないよ」

会社を後にした小鳥遊は、レセプション会場のホテルへと向かった。

「あ、叔父さん、お久しぶりです」

会場で叔父を見かけ、めざとく駆け寄る。

「おお、祐一郎か。同じ会社なのに、なかなか会わないな」

「外回りばかりで会社になかなかいれなくて」

世間話のついでに、叔父の秘書にさやかから預かった稟議書を差し出す。

「こんなところですみませんが」

小鳥遊は外向けの爽やかな笑顔で、秘書の女性に書類を手渡した。小鳥遊よりは年上だが、叔父  
よりはずっと年下の彼女は中身を確認した後、にこやかに書類を受け取った。

「まあ、とんでもないわ。祐一郎さん」

そのまんざらでもない表情に、小鳥遊は微笑みを返す。

——自分も図太くなったものだ、と小鳥遊は思う。

容姿を使って、便宜を図ってもらうことをなんとも思わなくなった。

昔は女性に意味もなくよくされることが苦痛だった。誰も自分の内面を見てくれないと思い悩ん  
でいた。

だが、社会人になってからはものの見方が変わった。

（もつとも、容姿は武器になるけど——仕事はそれだけでどうにかなるものじゃない）

仕事では顔ではなく、実力を評価される。生まれ持った甘い顔立ちのせいで、良くも悪くも容姿

で評価されがちだった小鳥遊にとつて、それはなんとも新鮮なことだった。

自分が頑張ったことが評価される。まるで、自分そのものを認めてもらえたかのように嬉しかった。

同時に、周りを蝶々のごとく飛び交う美しい女性たちになにかを期待することも、反対に見下すこともなくなった。

（これは仕事。それにこの容姿が使えるなら、使うに越したことはない）

あらゆる女性に感じよく接し、誘われれば誰とでも喜んで食事に行く。今ではすっかり割り切つて女性に微笑みかけることができるようになった。

そんな己の変化にしみじみしつつも、叔父たちと談笑していると、後ろからコツ、コツと冷たいヒールの音が聞こえてきた。

「あら、おじ様。それに祐一郎さん。お久しぶりです」

来たな。小鳥遊はそう思つて、笑顔を貼り付けて振り向いた。

「久しぶりだね。麗美さん」

品のよい微笑みを浮かべながら、ノブルなツイードのスーツという出立ちで現れたのは小鳥遊の元婚約者——天文館麗美だった。

レセプション開始の時間となり、麗美はごく自然に小鳥遊の横へと並んだ。

ここは礼儀として、なにかしら会話すべきだろう。小鳥遊は司会の挨拶の合間に、隣へ顔を向けた。

「久しいね。元気にしているかい」

すると麗美はわずかに不服そうな顔を見せたが、すぐに能面のような、表面的な笑顔を取り繕った。

「そう見える？ あなたは相変わらずみたいね。今は誰とお付き合っているのかしら。間違つても、おじ様の秘書と……なんておっしゃらないでね」

「ははっ、元氣そうだね。叔父と彼女の関係は知ってるから、さすがにそれはありえないかな」

「そう、ならよかった。ああ、それと私は最近気分が優れないのよ。いろいろありましたからね。

祐一郎さんはお元氣そうだけれど」

どこか冷たさを感じる麗美の笑顔に、またか……と小鳥遊はげんりした気持ちになる。

本心を言外に匂わせ、自分の望みを相手に叶えさせようとする——彼女はそういう性格の女性だ。容姿こそ美しいものの、小鳥遊は彼女の性格がどうも苦手で、どうしても最後まで親しみを抱けなかった。

「そろそろケジメをつけた方が君のためにもいいかと思つて」

もともと、麗美とは親族の紹介で出会つた。まだ学生だった小鳥遊は麗美の『言外に匂わせて相手を動かす』術にはめられた。着実に外堀を埋められて、いつの間にか婚約者になっていた。

（俺が知らない間に、親も親族も丸め込みやがつて……）

事態に気づいた学生の小鳥遊が、どういふことだと問いただしたら「周りが勘違いしたみたいね。祐一郎さんは私のことなんて……」と麗美は悲しげな顔をした。申し訳なかったと小鳥遊が慌てて

謝ると、麗美は「まあ、嬉しいわ。私たち、互いに想い合っていたのね」と微笑<sup>ほほえ</sup>みを浮かべた。そんな麗美の隣には、なぜか両家の両親たちがいて――

（親を盾にした脅し、だよなあ。今思えば）

しぶしぶ婚約に応じたものの、麗美は小鳥遊が最も苦手なタイプの女性だった。

お互いの考えや思いを通わせるためのコミュニケーションは一切なく、彼女はいつもレストランの格や、どのデパートに出かけるかばかり気にしていた。

肩書き、財産、親族の中での立ち位置、一生でどのくらい稼ぐか――そういう観点から小鳥遊を値踏みし、夫としての価値を見定めたのがありありと伝わってきた。

一緒にいて息の詰まる日々だったが、それでもズルズルと婚約者として過ごしてきた。

しかし先日、小鳥遊はとうとう婚約解消を決意した。

（出会っちゃったんだよなあ……あの子に）

だから重たい腰を上げ、仕事で身につけた図太さを生かしてうまく立ち回り――どうにか麗美との縁を断ち切った。

婚約解消の申し出に、最初こそ麗美は抵抗するような様子を見せたが、小鳥遊が本気であると察してからは食い下がっても無駄と判断したのか、おとなしく婚約解消に同意した。

「好きでもなんでもない相手と結婚するのはどうかと思うんだよね」

爽やかな笑顔で、小鳥遊は隣の麗美にそう語りかけた。

プライドの高い麗美は婚約中、一度たりとも小鳥遊を好きだと言ったことも、そういった素振り

を見せたこともなかった。主導権を握るため、彼女は『高嶺の花』でいたかったのだろう。

「ええ、そうね」

ギリ、と歯を噛み締める音がかすかに聞こえたような気がしたが、麗美は微笑<sup>ほほえ</sup>みを絶やさない。

そして優雅な足取りで小鳥遊から離れ、別の知り合いの元へ向かった。

歩き方、服装、立ち振る舞い。すべて完璧な両家の子女。

そんな麗美の姿を見て、小鳥遊はつくづく思った。

（ああ、婚約を解消してよかった）

一生彼女の奴隷なんて、ゾツとする。

（もし結婚するなら――せめて、冗談を言って笑い合えるような、そんな相手がいい）

小鳥遊の脳内に、会社の生意気な後輩の顔が浮かぶ。その途端に、小鳥遊の気持ちはぱっと明るくなり、ふわふわと浮つく。

（あの仏頂面がいいんだよなあ）

いけ好かない猫などどうでもいい。あの可愛らしい不機嫌な『亀』のことが、どうにも気にかかって仕方ないのだった。

## 第一章 エレベーターで二人きり

「……これ、私たち今日帰れますかね？」

しとしと夕立が降り出した月曜日の夕方。さやかはパソコンを前に呆然とつぶやいた。

「亀山さんも部長もすみません……私のせいで」

泣きそうな声で後輩が言う。なんと過去の帳簿のデータが、彼女の操作によってうんともすんとも言わなくなってしまったのだ。

部長は渋面でこう言った。

「仕方ない……昔のマシンを持ってきたて繋ごう。亀山、場所知ってるよね？」

「はい、持ってきますね」

確かに以前のパソコンなら、データが残っているかもしれない――

（けど、重たいんだよねあ……）

一階の隅の倉庫部屋に押し込まれたパソコンを探し当て、さやかはため息をついた。

「はあーあ」

しかし仕事だ。持っていかなければ話にならない。さやかは付属品ごとよいしょ、とパソコンを持ち上げた。

（くっ……重い！）

若干よろめきながら、部屋を出て階段へ向かう。重さに負けまいと踏ん張ると、先週挫いた右の足首が鈍く痛んだ。

（ひっ……どうしょ）

さやかは立ち止まって、すぐ横を見た。折よくエレベーターがピンポンと開いたところだった。

（うう……）

さやかは不穏な右足を見下ろし、ぐつと唇を噛んだ。

（ただでさえ残業が長引いているのに、ここで足をまた挫いたりしたら）

面倒すぎる……。背に腹は代えられない。

大丈夫、ただの箱、箱――五階までは、目を瞑れば一瞬だ。

そう思いながら、さやかは意を決してエレベーターに乗り込んだ。

「閉まります」と声がし、扉が動き始めたその時――

「待って！」

威勢のいい声とともに、長身の男が飛び込んできた。間一髪で彼を通し、扉はするすると閉まった。

「はー、間に合ったあ」

ふつと髪をかき上げて、小鳥遊は安心したように言った。

「ごめんね、無理やり押し入って」

かき上げたその髪は濡れていた。

「傘……忘れちゃったんですか？」

「いや、さしてたよ。でも傘ふつとばすくらいの雨になってきちゃってさ」  
参ったなー、と言いながら、小鳥遊は鞆かばんをさぐる。

——濡れたせいで、いつも上がっている前髪が額にかかっている。雫が滴る髪は濡れてもなお、栗色に艶めいていた。

それを見て初めて、小鳥遊の髪色は地毛なのではないか、とさやかは気がついた。

すると不意に、小鳥遊がさやかを見て笑った。

「なに？ そんなに見て」

余裕たつぷりの、からかうような顔。

——濡れても、自分がかっこいいって完全にわかっている。

（俺に見惚みとれてたんでしょ？）

という幻聴が聞こえる。

「べっ、別に！」

絶対にそんなこと言うもんか。さやかは顔を逸らしたまま、表示板を見つめた。

——もうすぐ五階だ。早く着いて。

しかしその時、外から地割れのような音が聞こえた。

「え……？」

ひゅん、と足元が一瞬沈むような感覚がした後、エレベーターが止まった。その瞬間、ふっと照明が消え、うつすらと非常灯がついた。

「え……嘘」

「止まっちゃったかな」

小鳥遊も表示板を見上げている——が、その声は飄々ひょうひょうとしていて、どこか楽しそうだ。

——冗談じゃない！

さやかは持っていたパソコンを床に置き、五階行きのボタンを何度も押した。

「お願い、反応して……！」

しかし、繰り返しボタンを押すさやかの手を小鳥遊が掴んだ。

「まあ、待ちなよ。多分雷で停電しただけだ。数分後には復旧するよ」

「で、でも、それでも」

さやかは口籠くもった。焦りがじわじわと身体中に広がっていく。

（冗談じゃない——いつも乗らないようにしてたエレベーターで、まさか、まさかこんな事態になるなんて）

足がカタカタ震え出した。募る焦りが、だんだんとパニックを引き起こす。

（い、いや！ 出して！ 今すぐ出ないと——私）

喉がつかえて、息がしにくくなってきた。

「亀山さん？ 大丈夫？」

さやかは一步引いた。

「へいき、です」

「いや、具合悪そうだよ。もしかして、こういうの苦手？」

その声が意外にもからかいではなく、気遣いの声だったので——さやかは素直にうなずいた。

「はい、ちよつと、狭い場所が苦手です」

そう言いながら、最後の希望に縋<sup>すが</sup>ってポケットをさぐる——が、案の定、スマホはない。  
(机の上に置いてきちゃった……)

「ちよつと待って、外と連絡取ってみるよ」

小鳥遊がずっとスマホを取り出して、耳に当てた。

「もしもし……小鳥遊だけど。うん、そう。やつぱ停電か。復旧するよね？」

さやかは口に手を当てた。呼吸が苦しい——まずい。さやかは思わず膝をついた。

過呼吸の症状だ。もう、なりふり構ってられない。

「え、バックアップ電源——今調べてる？　そうか、停電なんて滅多にしないもんな、わかった」  
電話を切った小鳥遊は、慌ててさやかの前に膝をついた。

「どうした、苦しい？」

「どうしよう。よりによって、いつも塩対応している人の前で、こんな——」

「だ、いじょうぶ、です」

息を詰まらせながらも首を振ったが、小鳥遊は納得しなかった。

「どう見ても大丈夫じゃないでしょ。喘息かなにか？」

「ち、が——過呼吸、で」

「過呼吸」

呆然と小鳥遊がそう繰り返した。

そりゃあそうだ。普通の人は過呼吸の症状も対処法も、知らないだろう。

さやかは目を瞑<sup>つぶ</sup>って、苦しい呼吸をしずめようとうとうにか努力した。壁にもたれて、楽な姿勢で。  
大丈夫、大丈夫、落ち着いて——

「……つまり不安から、息が吸えなくなってるってことか」

不意に声がして、トン、と小鳥遊がさやかの顔の横に手をついた。

目を開けると、目の前に小鳥遊の顔があった。思わず間拔けな声が出る。

「へっ」

至近距離の瞳が、さやかをじっと見つめている。臆することなく切り込んでくるような視線に驚く。

「これで楽になるかわからないけど」

近づいてくる、と思った時には、身体ごと抱きしめられていた。

「大丈夫だから」

あくまで優しく、彼はさやかの背中をトントン、となだめるように一定のリズムで叩いた。

「ほら、俺の手に集中して」



彼のその言葉に、意識が呼吸から、背中を叩かれる感覚に逸れる。

情けないが、背に腹は代えられない。さやかは素直に意識を彼の手に集中させた。

「すぐに出られるから、心配しないで」

薄暗闇の中、溺れそうなさやかの身体を小鳥遊はしっかりと抱き留めてくれた。その感覚は、確かに恐怖から意識を逸らしてくれた。

——あったかい。まるで私をなにかから守ってくれてるみたい。

「……俺が一緒だから」

気がつくのと、さやかの呼吸は元通りに戻っていた。

「あ……」

戸惑うさやかに、小鳥遊は目を細めるようにして微笑んだ。そして——止める間もなく、その唇が、さやかの唇の上にのせられた。

「——!？」

かすかなミントの香り。

ほんの一瞬で唇は離れていった。小鳥遊はさやかを見下ろしてにこりと笑った。

「もう、大丈夫そうだね」

さやかは呆氣にとられたが、まずは抗議した。

「ちよっ……何を、するんですか……っ」

すると小鳥遊は悪びれずに言った。

「何って、亀山さんを助けたつもりだけど」

——そうだ。確かに、彼のおかげで、さやかは窮地を脱した。

羞恥心と焦りとバツの悪さがごっちゃになって、さやかは脱力してしまった。

「す、すみま、せん……」

——悔しい。よりによって小鳥遊に、おめおめと自分の弱みを見せてしまったことが。

（なんのつもりで、キスなんか……そっか、また、からかわれてるんだな……）

本当に、いい性格をしている。けれど、助けてもらったから、文句を言うこともためらわれる。俯いて考えていると、くつと顎に触れられた。

「俺にキスされたの……そんなに嫌だった？」

小鳥遊の唇がほんの少し、への字型に歪んでいる。

さやかはすす……と壁に沿って移動しながら小鳥遊から離れた。

「……でも、助けてもらいましたし……手を煩わせて、すみませんでした」

もう大丈夫、とアピールするために、さやかは立ち上がった。

すると小鳥遊も立ち上がり、壁にもたれた。

「謝るんじゃないくて……感謝してほしいなあ」

くっ……と思いがちながらも、社会人としてさやかは頭を下げた。

「助けていただいて……ありがとうございます」

うんうん、と小鳥遊は嬉しそうにうなずいた。



「亀山さん、また俺に貸し、作っちゃったねえ」

「そうだ、稟議書。忌々しい思いで、さやかはため息をこらえた。」

「仕事でいつか返し……ますから」

「それっていつになるのかなあ」

「領収書うつかり溜めちゃった時とか……取りに行きます」

「俺、基本その日か翌日には君に提出してるでしょ」

「そうだった。」

「う……マメですよ、小鳥遊さんって」

すると小鳥遊はふつと皮肉げな笑みを浮かべた。

「それでもないよ？ 他の書類は割とルーズ。でも、領収書だけは溜めないって決めてる」

それは、経理としてはありがたい限りだ。

「はあ、ありがとうございます……」

「ねえ？ だから、他のことで返してくれないと」

人の手助けはただではない。人生——特に仕事は、ギブ&テイクだ。助けてもらった分を返せない人間は、信用を失っていく。当たり前前の常識だ。

無償で誰にでも親切にしてくれる人なんて——それこそ橋本のような、特別優しい人間だけ。それを他の人間にも期待するのは、お門違いだ。

「何をお望みでしょう……？ け、経理のお金関係のことは無理ですよ！」

さやかはおそるおそる口を開いた。もし、後ろ暗い仕事を頼まれたりしたらどうしよう。経理や税理士が会社のお金を横領、なんてよく聞く話だ。

すると、小鳥遊の顔つきが変わった。周りの温度が一度下がったような気がする。

「亀山さんさあ……俺がそんなことを頼むとも思ったの？」

あ、やばい。怒らせた。確かに失礼な物言いだった。さやかは焦った。

「す、すみません、そういうつもりじゃ……ただその、セミナーとかでよく聞くので、気をつけなさいって言われて……」

すると小鳥遊はため息交じりにこう言った。

「お礼って言ったらさ……もったこう、一般的な方法がいくらでもあるでしょ」

「いくらでも……」

そう言われて、真っ先にパツと思いついたのは菓子折りだった。けれど御曹司の彼を満足させられるようなお菓子なんて、わからない。

なにせ、ド庶民のさやかが一番好きなお菓子は自分で作るチョコチップとバターたっぷりのクッキーだ。そんなもの、お礼になるわけがない———と思いつながら、さやかは口を開いた。

「あの、好きなお菓子とかがありますか？ デパ地下で買ってきます」

すると小鳥遊は、わざとらしくがっかりした声を出した。

「ええー、お菓子かあ……」

「甘いもの、そんなに好きじゃない感じですか？」

「スイーツは人並みに好きだけど……どうせならこっちがいいな」

彼の指が、さやかの顎にかかると。彼の顔が再び近づいてきて、さやかは狭いエレベーター内でざざっとカニのように移動した。

「待って待って、おかしいでしょう！」

真顔で抗議するさやかに、小鳥遊も真顔で返した。

「なんもおかしくないよ。俺、お菓子よりも、女の子とキスの方が好きなんだよね」

「他の女の子にしてください！　いくらでもいるでしょ!？」

すると小鳥遊はにっこり爽やかに笑った。

「それでも、君がいいって言ったらどうする？」

さやかは絶句した。

「なんです？　新手の嫌がらせですか……？」

するとクスツと笑って、小鳥遊はさやかの頬を指先でつついた。

その笑顔に、ほんの少し影があるように見えるのは気のせいだろうか。

「ちよっと。心の声、口に出ちゃってるよ？」

「と、とにかく困ります、そんなことは」

「もうキスしちゃったのに？」

「さ、さっきは仕方なく——」

「でも、悪くなかったでしょ？　俺にキスされるのも、抱きしめられるのも。だんだん身体、力抜

けてったもんね？」

「そ、そんなことはありません！　それに、噂にでもなったら困るんで……っ！」

しじろもどろのさやかに、小鳥遊は追い打ちをかけた。

「俺、口堅いよ。秘密を守るには、どうすればいいのかもよく知ってる。俺と遊んでも絶対誰にもバレないから、そこは安心して」

小鳥遊はさやかの耳元でそうさやいた。

「ねえ、亀山さん——助けた代わりに、俺とキスフレンドになってよ」

「……はい？」

今、この男はなんて言った？

思わずさやかは思考停止して、ぼかんとしてしまった。

「一週間でいいよ。なってくれたら——もう君にちよっかいかけないから」

その言葉に、さやかの耳はぴくりと動いた。小鳥遊にもう絡まれなくなるのなら、それは本望だ。心かき乱されることなく、穏やかな気持ちで仕事に打ち込めるようになる。

「……本当に、一週間だけ？」

「ほんとほんと。これからはちゃんと定時までには領収書出すようにするし、もう構わないって約束する」

それは——願ってもないことだ。小鳥遊は決まって定時後、経理部の他のみんなが帰ったタイミングで領収書を持つてくるものだから、さやかが対応せざるを得なくて辟易していた。

「これからは時間内に来てくれます？ 部長やみんながいる時間に」

定時後、小鳥遊と二人きりでいるのを誰かに見られて、妙な誤解をされたくない。

そんな気持ちから、ついそう尋ねてしまった。

「うん、約束するよ」

うなずくその目はまっすぐにこちらを見つめていて、まるで逃がさないとでも言っているようだったが——さやかはうつかり了承してしまった。

「約束してくれるなら……」

朝日の眩しい午前八時。さやかは最寄り駅のコンビニで粒ガムのスティックを大量に買った。ひとつは鞆<sup>かばん</sup>に。もうひとつはポケットに。そして、デスクにもストックしておく必要がある。

——昨日小鳥遊と、取り引きをしたから。

助けてもらったお詫<sup>まづ</sup>びに、キスをする事。

しかし、これだけの条件だと分が悪いので、さやかからも条件をつけさせてもらった。

キスは誰も見ていないところだ。

本当は期間ではなく回数で終わりを決めておきたかったけれど、小鳥遊が難色を示したので、仕方なく一週間ということに同意した。

つまり月末まで、さやかはいつどこで小鳥遊からキスを仕掛けられるかわからない。

もちろん、こんなことは不服だ。しかし、あのエレベーター内で、さやかは彼の営業仕込みの有

無を言わせないトークに負けてしまったのだ。

（ほんと、条件を出すのがうまい……悔しいけど、さすが営業部のエース）

一週間だけ我慢すれば、これからはちゃんと定時までに領収書を提出してくれると約束してくれた。

取り引きに応じてしまった以上、割り切って受け入れるしかない。さやかは粒ガムを口に入れて、無気力に噛んだ。ミントとベリーの風味が広がる。

（一週間、どうにか乗り切って……安心安全な残業ライフを手に入れるんだ）

大丈夫、たかがキス。

無心でひたすらガムを噛みながら、さやかは電車に揺られて会社へ向かう。

——あの時、小鳥遊からはミントの香りがした。抱きしめられた腕は、温かった。  
（つて、何思い出してるの。やめやめっ）

これ以上からかわれるのはごめんだと思い、さやかは先手を打つことにした。

（キスから卵焼きの味がする——なんて言われてからかわれるの、嫌だし！）

いつくるか、いつくるか——と、ヤキモキピリピリしながら一日中ガムを噛んでいたが、小鳥遊は経理部に姿を現さなかった。

（よくよく考えてみれば、用事もなく、経理になんて来ないよね）

領収書がなければ用無しだ。そう思ったさやかはほっとして肩を回した。すでに定時を過ぎてい

るし、今日のうちに片づけておきたかった仕事はついさつきすべて終わった。

（今日はもう帰ろう）

さやかがそう思ったまさにその時、背後から声が聞こえてきた。

「失礼します……ん？　なんかミントの匂いがする？」

油断した——退社間際に来るとは。

反射的にさやかはガバツと後ろを振り返った。しかし、そこに立っていたのは小鳥遊ではなく橋本だった。

「これ、こないだ頼まれた古いパソコンのデータ」

差し出されたメモリを、さやかはありがたく受け取った。

「一応、今のマシンのスペックに合わせて最適化しといたけど、なんかあったら言って」

「ありがとう。明日確認するね」

さやかは涼しい顔で受け取ったメモリをデスクにしまつて、ふうと小さく息を吐いた。

（……小鳥遊さんに遭遇する前に、さつさと帰ろう）

一日中気を張っていたせいか、なんだか気疲れてしまった。だけど、退社してしまえばもう気を張り続ける必要もない。そう思ったさやかはすみやかに立ち上がり、帰り支度を始めた。

すると、橋本が思い出したように話しかけてきた。

「そうだ、今日同期でご飯行くけど、亀ちゃんも来る？」

「んー」

さやかは一瞬迷つたが、今日一日、小鳥遊から逃げ切れたことで気が大きくなっていた。

「せっかくだし、行こうかな」

「じゃあ、エントランスで。店決まってるから、行きたいところ考えといてよ」

「了解」

鞆<sup>かばん</sup>を肩にかけて、足取り軽く階段へ向かう。

やっぱり、エレベーターより階段がいい。

（運動にもなるし——足、治ってよかった）

どこの店がいいかな。こないだ見かけた新しいお店？　それともいつもの、お通しが美味しいお店？

上機嫌にそんなことを考えていたせいか、さやかは迂闊<sup>うかつ</sup>にも、踊り場で誰かとぶつかってしまった。

「わっ……すみません！」

さやかは慌てて後ずさって謝った。すると——

「亀山さん、そんなに嬉しそうにどこ行くの？」

小鳥遊が、さやかを見下ろしていた。

「あ……お疲れ様です」

思わず顔を逸らしながら、さやかは通り過ぎようとした。

「待ってよ。教えてくれたっていいじゃん？」

「別に……同期とご飯行くだけです」

彼の目が一瞬鋭くなる。

「へえ、橋本くんとか？」

「はい、あとは他の人も」

「ふうん……それなら、俺も混ぜてもらおうかな」

「え」

「いいよね？」

「まさか小鳥遊さんが来てくれるとは」

ほくほくのエビス顔で、橋本がジョッキを傾ける。

「一体どういういきさつで？」

興味津々に覗き込んできたのは、企画部のムードメーカー、蓮田だ。

「んー、帰りの階段でたまたま亀山さんに会って、飲み会あるって言うから」

「飲み会って言っても、そんな大層なものじゃ」

「いつもこのメンバーで飲んでるの？」

にこやかに穏やかに、小鳥遊が質問する。

「そつすね！ 俺と、はしもつちゃんと亀ちゃん、それに今はいないけど、同じ企画の山ちゃんも」

少し考えた素振りの後、ああ、と小鳥遊はうなずいた。

「春から産休に入った山崎さんだね」

「そうなんすよ！ なんか焦りますわ、同期が結婚とか出産とか」

「山崎さんって、確か職場結婚だよ。相手は確か広報の——」

「そうそう、広報の課長ですよ」

「歳の差あるけど、仲いいみたいで羨ましいなあ」

「いやでも、旦那が上司って、気い使いそう〜！」

そんな会話を繰り返る蓮田と橋本を見る小鳥遊の目が、なんだかキラリと鋭く光った気がした。  
「職場結婚もありじゃないの？ 君たち同期、仲いいみたいだし」

すると二人ともぼかんとした。

「うーん、どうですかねえ」

「いやいやいや——俺たちはそういうのはなしつすよ！ 同期と書いてライバルと読む、つてなもんでっ！」

「なるほど」

ビール片手に満面の笑みを浮かべてそう答えた蓮田と、冷静に情報を引き出した小鳥遊の姿に、さやかはなんだか不安になってきた。

「それより、小鳥遊さんはどうなんですかつ！ えぐいモテそう〜！」

こういう場で一切遠慮しない蓮田が、ズケズケと聞くと、小鳥遊は少しアンニュイな笑みを浮か

べた。

「こないだ別れちゃってね。今はひとりだよ」

(えっ……そうだったんだ)

決まった相手がいたということに素直に驚く。いろんな女の子と遊んでいたイメージだったけれど――さやかは思わず、ちらりと小鳥遊を見た。

「えー!? なんですつか? こんなオトコマエと別れるなんて!」

「んー、性格の不一致ってやつかなあ。蓮田くん、いい飲みっぷりだね。見てて気持ちいいな」

小鳥遊はここぞとばかりに爽やかな笑みを浮かべた。蓮田が一瞬見惚れてポカンとなった後、犬みたいに嬉しげに尻尾を振った。

「へへ、あざっす! 先輩!」

にこにこしながら、小鳥遊は空になったグラスを端に寄せて追加注文をした。

(あーあ、蓮田、小鳥遊さんのペースにのまれてるな……)

小鳥遊に「ここは俺が」と言われて、一足先に同期三人で店を出た。

時間は十一時。終電まであと少しだ。

案の定へろへろになった蓮田は、橋本に抱えられて伸びている。

「なあ、はしもつちゃん。もう一軒付き合えよお」

管を巻く蓮田に、はいはいと答える橋本。

「もう無理でしょ。タクシーで帰るよ。一緒につかまえてあげるから」

酔っ払いの面倒を任せるようで気が引けるが、二人はこう見えて仲が良い。この後なんだかんだ言って、男だけで二軒、三軒と深酒をするのだろう。

「気をつけてね、私は終電あるから行くけど」

さやかは苦笑しつつも、いつものようにそう言った。

「大丈夫? 亀ちゃんもタクシーと一緒に帰る?」

珍しいことに、橋本にそんな提案をされた。

「やだよー、それって蓮田とハシゴした後の話でしょ? そんな体力ない」

「いや、今日はもうマジでタクシー呼ぶよ」

橋本の目はいつものほんわりとした感じではなく、真剣だった。

その時、店から小鳥遊が出てきた。

「ごちそうさまです、小鳥遊さん」

「ありがとうございます……!」

橋本も、そして蓮田も頭を下げる。もちろんさやかも。

「蓮田くん大丈夫? タクシー呼んどいたけど」

そう言いながら小鳥遊は、路肩に停まっているタクシーを目線で示した。

「ああ、すみません。小鳥遊さん」

「失礼します……」

何度も頭を下げ、橋本が蓮田を抱えて乗り込む。「亀ちゃん」と車の中から橋本がさやかを呼ぶ声が聞こえた。

しかし、ドアが閉まってタクシーは出発した。

「あ……」

じゃあね、というタイミングを逃してしまった。そう思いながら、さやかはそのままタクシーを見送った。

「楽しかったな。いい同期だね」

ふとそう言われて、さやかははっとした。まだ小鳥遊がいたのだった。

「すみません、全員奢ってもらって」

「いや？ 最初からそのつもりだったから。年上だしね」

まあ、彼からすればこんな大衆店の支払いなど痛くも痒くもないのだろうが、奢りは奢りだ。

「ありがとうございます。蓮田も橋本も、小鳥遊さんが来てくれて喜んでました」

そう言ってさやかはきちんとお辞儀をした。「そんな気にしないでいいのに。こちらこそ楽しかったから、ありがとう」とからっとした口調で言われ、さやかはちよつと小鳥遊を見直した。

しかし顔を上げると、そこには熱っぽいまなざしをした小鳥遊がいた。

「で、二人きりだね」

その捕食者めいた視線を浴びて、遅ればせながらさやかは気がついた。

（待って……あ、これって）

橋本たちと一緒にだから、とすっかり警戒を緩めていた。もしやこの状況は、してやられたのだろうか。橋本がいつになく真剣な様子だった理由が今更わかった。

（私を心配して、タクシーに誘ってくれたのか……）

いつも通り解散してしまったことをさやかは後悔した。しかし、すぐに気を取り直す。こちらには天下の宝刀、終電があるのだ。

「では、失礼します。終電の時間なので……！」

しかし小鳥遊はにこにこ笑って、再び路肩を指し示した。黒塗りの車がスーツと現れる。どう見てもタクシーではない。これはもしかや……

「うちの車。ねえ、少し遊びに行こうよ」

冗談じゃない。ここで車に乗ったらろくでもないことになる、地味女でもさすがにわかる。

「い、いえいえいえいえ！ そんな！ 私は電車で……」

しかし笑顔を絶やすことなく、小鳥遊は言い放った。

「一週間、って約束だったよね？」

契約不履行するつもり——？

そんな幻聴が聞こえたが、さやかはささやかな抵抗を試みる。

「で、でも、その……もう夜遅い時間ですし……！」

我ながら、よくわからない言い訳だ。しかし小鳥遊は、さやかの耳元に唇を寄せて言った。

「大丈夫、キスするだけ。それ以上のことはしないよ」



「で、でも……」

なおも拒もうとするさやかを見て、小鳥遊は少し切なげな表情で唇を尖らせた。

「……俺と二人きりは嫌？」

——そんな顔をするなんて、ずるい。

まるで渋っている私の方が悪者みたいじゃないか。

さやかはあとため息をついて、車へと向かった。自動でドアが開く。

「終電ギリギリまで——一時間だけなら、お供します」

さやかに続いて小鳥遊も乗り込むと、ハイヤーは滑るように走り出した。

エンジンの音が全然しない。どんな仕組みかはわからないけれど、とんでもなく値が張る車だということだけはわかる。

（ああ……一体どこに向かっているんだろう）

もしホテルとかだったら、さすがに振り切って帰ろう。大丈夫、東京ならどこで降ろされてもどうにかなる。

（いやでも、バーとかかな？ 御曹司御用達の、敷居の高そうなお店……とか）

あれこれ考え込むさやかを見て、小鳥遊はくすりと笑った。

「心配そうな顔。どこに連れてかれるのかって、考えてるの？」

内心を言い当てられ、肩が揺れそうになった。けれど、ここでおどおどしては相手の思う壺。さ

やかはどうにか平静を装った。

「別に。不本意なことがあれば、振り切って逃げるだけですから」

やれるものなら、やってみる。心の中で、無理矢理自分を奮い立たせる。

「好戦的だねえ。毛を逆立てた猫みたい」

しかし、小鳥遊はリラックスした様子でそう答えた。思わずさやかは肩をすくめる。

「でも、そんなとこがいいな。君みたいに素直な人、意外といないんだよね」

これは口説かれているんだろうか。

そう思うと、途端にスッと表情筋が仕事をしなくなった。

「さすがですね、小鳥遊さん。いろいろと」

「どうしたの、いきなり」

「小鳥遊さんの噂は辺境の経理まで流れてきましたからねえ」

「なに？ いい噂？ 成績優秀だって？」

さやかは指折り数えた。

「最初はウチの会社一美人と評判の受付嬢さん、その次は総務の女の子、その後は派遣の子に取引先に——羨ましいです、あんな綺麗な人たちにちやほやされて」

さやかは皮肉った。

「亀山さんも十分綺麗だよ」

そう言われて、露骨に顔をしかめてしまった。



——そんなお世辞、嘘が浮き彫りになって、かえって残酷だとわからないだろうか。  
「いいんで、そういうの」

嫌というほどわかっているのだ。一時の遊びとして、小鳥遊がこうして自分をからかって楽しんでいるということが。

（ちやほやしてくれる美人に飽きたから、塩対応の地味な女で遊ぼうと思ったんだろうな）  
毎回高級フレンチを食べていると、たまにジャンクフードをつまみ食いしたくなる、そういう話だろう。

「あつ、ため息ついた。俺のこと、信用ならないって思ってるでしょ？」

軽い口調でそう聞いてきた小鳥遊に、さやかはにべもなく返した。

「信用ならないっていうか……早く飽きて、他に行ってくれないかなって思ってます」

「あのね、会社の人とは付き合ったことないよ、誰とも」

「そうなんですか？」

「食事に行くくらいはしたけど」

「はあ……」

どうでもいいと適当な相槌を打ったさやかとは対照的に、小鳥遊はわくわくとした様子で話を続けた。

「でもこれから行くところは、女の子を連れていったことない。俺の隠れ家なんだ。君が気に入ってくれるといいけど」

その目が存外、少年みたいにキラキラしていたので、さやかはなんだか毒気を抜かれてしまった。  
「それって……どんなところなんですか」

すると彼は、いたずらっ子のような顔をして言った。

「着いてからのお楽しみ」

なんだか道路が広くなってきたな、と思ったたら、高層ビルの立ち並ぶ埠頭<sup>ふ頭</sup>で車は止まった。

「あれ、海……？」

勝手知ったる様子で、小鳥遊は海を望むテラスデッキへと入っていく。慌ててついていくと、そこにはとんがり帽子のような白いテントがいくつも建っていた。

「おいでよ」

さやかに声をかけて、小鳥遊はテントの中へ入った。

「あの、ここって……？」

「俺のテント。ほら、ちよつとだけど星も見える」

小鳥遊に促され、さやかはテント内の椅子に座った。

こざっぱりした白いテントの中は意外と広くて、椅子の他にテーブルも置かれていた。天井は一部透明になっていて、夜空が見える。

「あつ、本当だ、星」

「よく見ると、北斗七星とか見えるよ」

小鳥遊はなにやら、テーブルの上のアルコールランプのようなものをいじっている。ほどなくして、ティーバッグの入ったマグカップを差し出された。

「はい、紅茶。熱いから気をつけて」

さやかは少し意外に思いながらも、素直に紅茶を受け取った。

（これ高い紅茶だ……美味しそう）

紅茶から立ち上る香りを味わってから、さやかはあたりを見回してうなずいた。

「ここ、あれですね、今流行りのグランピングってやつ。小鳥遊さんが好きなのはちょっと意外ですね」

「そう？ 仕事終わりとかにひとりぼっちと空を眺めるの、楽しいよ」

「あー、そう言われると、わかるかもです」

この東京で、星空をゆったり見上げる時間は確かに貴重で贅沢なもののだろう。

「でしょ？ 本当はもつと夜空が綺麗な山とかに行ってみたいんだけど」

憧れるようなその口調に、さやかは思わず口を挟んだ。

「いやいや、夏は蚊が出るし冬は雪だし、やめておいた方がいいですよ。この方がずっと快適です」

「詳しいね？」

「……田舎から出てきたんで」

「上京してきたんだ？ すごい」

「全然……小鳥遊さんの方がすごいですよ」

「なんで？ 小鳥遊家の人間だから？」

「いや……小鳥遊さんの営業成績一位は、たぶん家とは関係ないですよ？ そりゃ百パーないとは言いませんが」

じつと小鳥遊が続きを待っている気配がする。ので、さやかは続けた。彼の女性に対しての軽薄な態度は好きではないけれど、だからといって、彼の仕事ぶりをないがしろにするつもりはない。

むしろ、仕事に対して手を抜かないようにしているさやかだからこそ、彼を羨み、そして尊敬もしていた。あくまで仕事の実績についてのみだが。

「いいところおぼっちゃまだからって、全員が優秀なわけじゃないだろうし……何よりうちの会社の営業って、肩書きだけで仕事取ってこれるほど生優しくないと思いますし」

「へえ？ そう思うんだ？」

「わかりますよ、領収書見てれば。私たちは定時って概念ありますが、営業は深夜だろうがなんだろうが仕事取るためなら動いてるし……キツくて辞めていった人もたくさん知ってます」

さやかはちら、と隣の椅子に座る小鳥遊を見た。

「だから成績一位って、すごいと思います。尋常じゃない努力してるんだろうなって……本当なら私なんか、口をきくのも恐れ多いですよ」

さやかは紅茶を一口飲んだ。煎った茶葉の香りが香ばしい。

「なのでまあ、時間外の領収書提出もある程度は……と、受け取っていたんですが」